
ピザ・トースト

ごはんライス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ピザ・トースト

【Nコード】

N5242M

【作者名】

ごはんライス

【あらすじ】

いまいち面白くないのでまた書き直します。 5枚。

ピザ・トーストを食っていた。旨い。大山武彦は、コーヒーを飲んだ。

ぴんぽーん。

「はい」

玄関に行つてドアを開けると、そこには、幼馴染の西村が立っていた。

「どうしたんだい。西村」

「たけちゃん。大変だ」

「何がよ」

西村は、とにかく上がらせてくれという。武彦は、いいよと言う。

「お。ピザ・トーストやん」

西村はピザ・トーストを発見して、かじる。

「旨い」

武彦はかちんときた。オレのピザ・トーストを勝手に。

しかし、と少し思う。

大好きなピザ・トーストを旨いと言つてくれたのだからこれは嬉しいことかもしれない。例えば、大好きな妻を「かわいい」と言われれば悪い気はしない。まあ、妻はいないけど。

しかし、と思う。

妻を食べられたらやはり腹立つ。

殴つてやる。

そんな武彦の思いなど知らずに、西村はむしゃむしゃピザ・トーストを食らう。

「旨い。旨いなあ」

武彦は拳を握り締めた。

ぴんぽーん。

「むう。来客が多いなあ」

武彦は拳をしまい、玄関に行き、ドアを開けた。
すると、そこに、西村が立っていた。

「なんだ。またお前か」

「大変だ。たけちゃん」

「うるさいなあ。またオレのピザ・トーストを食べるつもりだろう。
その手には乗らないよ。オレは馬鹿じゃないんだ」

「何わけわかんないこと言ってんの。とにかく上がらせてもらおうよ」
「あつ待て。勝手に」

西村はずんずん進み、ピザ・トーストを発見した。

そして、当たり前のように、かじった。

「旨いなあ。むしゃむしゃ」

武彦はイライラする。何というやつだろう。けしからんやつだ。
殴ってやるうかと思う。

「ありがとう。たけちゃん。こんな旨いもの食べさせてくれて。あ
りがとう」

むむうう。感謝されると殴りにくい。例えば、妻を貸して西村
が感謝してくれたら嬉しい。妻はいないけど。いたらの話だ。
しかし。

妻を食べられて感謝されても、そんなの冴えない。

武彦はやはり殴ろうと思い、拳を握った。

ぴんぽーん。

「ああもう！しつこいなあ！」

武彦はぶりぶり怒りながら玄関まで行き、ドアを開ける。
やっぱり西村が立っていた。

「なんなんだよ！お前は！」

「何怒ってんだよ。たけちゃん」

「うるせえ！」

「まあいいや。とにかく大変なんだ」

「またオレのピザ食うつもりだろう！」

「は？何言ってるの。わけわかんない」

武彦はこいつしらばっくれるつもりかとマジでイラついてきた。

「大変なんだ。聞いてくれよ」

「知るかボケ！」

というやりとりをしてる途中、食卓の方で「ぎゃあああああああ」という悲鳴。

「むう。何事だ」

走って食卓まで行くと、ピザをくわえた西村がぁお向けに倒れていた。

「むむむ。どういうことだ。これは」

その瞬間、玄関でも「うぎゃあああああ」という悲鳴が聞こえた。

「え。なんや」

走って玄関まで行くと、西村が倒れていた。

「いったいどういうことだ」

武彦は混乱してきた。

いったい誰が犯人なんだ。西村を殺した犯人は誰なんだ。

呆然としてると、自分が包丁を持ってるのに気づく。

「ひっ」

驚いて、包丁を落としてしまった。

包丁にはたくさん血がついている。

「あわわわわわ」

武彦は恐ろしくなってきた。

「がしゃーーーーーん。

「今度はなんだ」

部屋に向かうと、窓が割られており、そこには、金属バットを持った男がうろろろしていた。あのバットでガラスを割ったのか。

「に、西村」

「あ。たけちゃん」

何と、その金属バットを持っていた男は西村だった。

「何してんだお前」

「いやあ。金目のもんがないかなと思ってね。オレ、先月リストラされちゃったからさ。お金がないんだよ」

「なんでオレの家に！」

「たけちゃんの家って知らなかったんだよ」

とにかく、武彦は、殴ってやろうと思った。

ただ、西村は金属バットを持っている。あれで打たれたらどうしよう。

とその時、玄関で悲鳴が聞こえた。

「またか！」

武彦と西村は玄関へ走った。

玄関には西村が二人倒れていた。

「むう。また犠牲者が」

その後ろには、日本刀を構えた男がいた。

西村だ。

西村の持った日本刀には血がべっとりついている。

「おのれ。この犯罪者め」

金属バットを持った西村と日本刀を持った西村がにらみ合った。

「死ね。この犯罪者め」

「殺してやる。この悪党め」

「やめるんだ」

突進する二人の間に、武彦が割って入ったら、金属バットが武彦の頭に当たり、日本刀が武彦の背中に切りつけた。

「うぎゃああああああああ」

武彦はあまりの痛さに絶叫した。

「おい。やばいぞ。病院に連れていかないと」

「本当だ。出血多量で死んでしまう」

西村は金属バットを捨てた。

西村も日本刀を捨てた。

そして、よいしょと、前と後ろから、武彦をかついだ。

その年、また失業率と自殺者数が上がった、と病院の待合室のテレビでやっていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5242m/>

ピザ・トースト

2010年10月10日03時30分発行